# 議事１　平成 22 年度調査成果

## Ⅰ　調査目的

妻木晩田遺跡の集落が営まれる弥生時代後半期の墓域の実態解明を目的に、墳丘墓の分布、形状、規模の確認、及び土壙墓の分布の確認を行い、得られた成果を基に、墓域と居住域との関係について検討し、妻木晩田遺跡の集落像を明らかにする。

## Ⅱ　平成 22 年度調査課題

段状地形及び墳丘状の高まりが認められ、墳丘墓や土壙墓が分布する可能性のある１区北側尾根、墳丘墓の広がりが予想される２区東側の発掘調査を行い、墓域の広がり及び内容を明らかにする。

**【課題】**

- １区北側丘陵に分布する段状地形及び墳丘状の高まりの内容把握。
- ２区東側の墳丘墓の広がりの把握。

## Ⅲ　仙谷地区東側丘陵の調査成果

・墓域は、１区、２区に限定されることが明らかとなったこのことから、東側丘陵は後期中葉と終末期の２時期における墓域であったと考えられる。また、墓域は丘陵頂部につくられる傾向にあり、斜面を利用して墓域を形成することがなかったといえる。

### １　後期中葉

・墳丘墓の数は１区で３基、２区で２基の合計５基ある。墳丘内及び周辺の埋葬施設を含めると、後期中葉の期間を通じて 38 名以上の人が埋葬されていたと考えられる。

**【構築順】**

・１区の墳丘墓は、切り合い関係や出土した遺物から３号墓→５号墓→２号墓の順に構築されたと考えられる。２区の６、７号墓については、出土遺物からは判断できない。

・１区と２区の関係については、出土遺物から５、６、７号墓がほぼ同じ時期と考えられることから、１区→２区の順に墓域が形成されたと考えることができ、また、後期中葉のある段階から２つの地区で墓域が併存していたことが想定される。

墳丘墓の構築順

| | 後期中葉 | 終末期 |
|---|---|---|
| １区 | ３号墓 → ５号墓 → ２号墓 | |
| ２区 | ┅┅ ６、７号墓 ┅┅ | ４号墓 |

**【墳丘形態】**

・１区は「四隅突出型墳丘墓（２号墓)」、「貼石を伴う墳丘墓（３号墓)」、「周囲に溝が伴う墳丘墓（５号墓)」があり、形態に違いが認められる。２区は「周囲に溝を伴う墳丘墓（６、７号墓)」であり、ほぼ同じ形態をしている。なお、墳丘墓の規模については５～12mである。

・後期前葉の洞ノ原地区、終末期の松尾頭地区の状況を含めると、「貼石を伴う墳丘墓」、「四隅突出型墳丘墓」→「周囲に溝を伴う墳丘墓」へと変化していく傾向がうかがわれる。

・妻木晩田遺跡では後期中葉の段階で、「周囲に溝を伴う墳丘墓」が導入されたと考えられ、その導入期には、１区で認められるように、旧い形態の墳丘墓もつくられていたと考えられる。

形態の変遷

| | ～後期前葉 | 後期中葉 | 後期後葉 | 終末期～ |
|---|---|---|---|---|
| 四隅突出型墳丘墓 | ＤＨ１、３、４、７、16 号墓 | ＤＨ８号墓<br>ＳＴ１、２号墓 | － | － |
| 方形で周囲に貼石を伴う墳丘墓 | ＤＨ２、６、14 号墓 | ＳＴ３号墓 | － | － |
| 周囲に溝を伴う墳丘墓 | － | ＳＴ５、６、７号墓 | － | ＳＴ４号墓<br>ＭＧ１、２号墓 |

ＤＨ：洞ノ原地区、ＳＴ：仙谷地区、ＭＧ：松尾頭地区

**【埋葬施設】**

・仙谷地区東側丘陵で最初につくられた３号墓は墳丘内に 22 基もの土壙墓（木棺墓）があるが、５号墓以降、１から３基と少なくなる。周辺埋葬については、墳丘内に埋葬施設が少なくなる５号墓以降に認められる。

## ２　終末期

・墳丘墓の数は２区の１基だけである。構造は周囲に溝がつく墳丘墓で、同じく終末期の松尾頭地区のものと類似する。規模もほぼ同じであり、共通性がうかがわれる。ただ、松尾頭地区の場合、それに続く時期のものが隣接してつくられており、その点が異なる。

仙谷地区東側丘陵墳丘墓一覧

| 調査区 | 遺構名 | 時期 | 規模（m） | 形態 | 盛土 | 構築 | 溝 | 外表 | 内部主体 | 周辺埋葬 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １区 | ２号墓 | 後期中葉 | 7.4×7.1 | 四隅突出 | 無 | 削出 | ２ | 貼石 | ３ | ２ |
| | ３号墓 | 後期中葉 | 12.6×9.7 | 方形 | 無 | 削出 | ０ | 貼石 | ２２ | ０ |
| | ５号墓 | 後期中葉 | 7.6×6.8 | 方形 | 無 | 溝 | ４ | 無 | ２ | ７ |
| ２区 | ４号墓 | 終末期 | 11.3×8.0 | 方形？ | 無 | 溝 | ２ | 無 | １以上 | ？ |
| | ６号墓 | 後期中葉 | 5.3×5.0 | ？ | 無 | 溝 | ２ | 無 | １以上 | ？ |
| | ７号墓 | 後期中葉 | 9.0×9.0 | 方形？ | 無 | 溝 | ２ | 無 | １以上 | ？ |

## ３　まとめ

・　今回の調査によって、仙谷地区東側丘陵の墓域は後期中葉、終末期の２時期において、１、２区の丘陵頂部に限定してつくられることが明らかとなった。

・　後期中葉には、「四隅突出型墳丘墓」、「貼石の伴う墳丘墓」、「周囲に溝を伴う墳丘墓」が、２から３基のまとまりとして墓域を形成していることが明らかとなった。

・　形態の違いについては、「四隅突出型墳丘墓」、「貼石を伴う墳丘墓」から「周囲に溝を伴う墳丘墓」へ移行する後期中葉において、新旧の墳丘墓がつくられていたことが要因と考えられる。

・　終末期では１基の墳丘墓が単独で分布することが明らかとなった。